

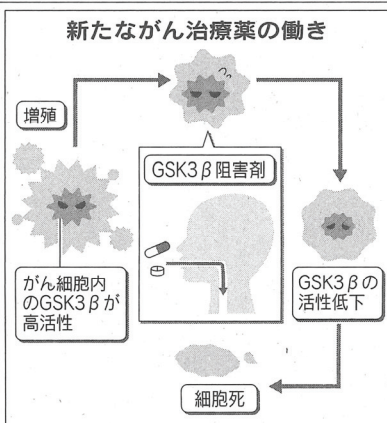
4種薬剤転用、がん新薬

金沢大が開発着手 悪性脳腫瘍向け

金沢大学は治療の決め手がないとされる悪性脳腫瘍(しゅよう)や、すい臓がんにも有効な治療薬の開発に着手した。精神疾患などに使う4種類の薬剤が、がんの進行を抑える性質を持つことに着目し、より効果の大きい新薬を生み出す。胃、大腸、肝臓などの消化器系がんにも効くと見ており、将来はがんの共通治療薬を狙う。大手製薬会社と組み、早ければ2〜3年以内に国への承認申請を目指す。

すい臓・胃・肝臓にも

脳腫瘍の一種である悪性神経膠腫(こうしゅ)は頭骨内にできる腫瘍の16%を占める。発症後の平均生存期間は約1年とされる。すい臓がんは年間2万3000人が亡くな



ら5年後の生存率は7%を下回る。いずれも正常組織への転移が早いという。既存の抗がん剤や放射線治療が効きにくい難治性のがんとされてい

潤一郎両教授を中心とする研究グループは、「ゲリコーゲン合成酵素キナーゼ(GSK)3β」という体内酵素が、「がん細胞の心臓のようなもの」(源教授)として、がんの進行にかかわって

これまでうつ病や胃かいような治療に使われていた4種類の薬を転用。従来の抗がん剤と組み合わせ、一定の効果を確かめた。

通常の治療後に再発した神経膠腫の患者を対象にした臨床試験では、生存期間がそれまでの平均に比べて最大で50週伸びた。すい臓がんについても、研究グループに参加している金沢医科大学で臨床試験を実施する見通しだ。

今後はこれら4種の薬を開発した製薬会社などと連携し、他の薬剤との組み合わせも研究する。科学技術振興機構の助成金などを活用しながら、がん治療に特化した新薬を開発する。

ヒトのがん細胞をマウスに移植した実験では、肺がんや乳がんを除くほとんどの部位で効果を認めている。源教授は「抗がん剤に比べて深刻な副作用がなく、他の正常細胞を傷まないため、幅広いがん治療に活用できる」と期待している。

いることに注目。この酵素の働きを妨げることなどで、がん細胞の増殖を抑え死滅に追い込む治療法にめどを付けた。

GSK3βの活動を抑制する薬剤としてリチウム製剤、シメチジンなど、

金沢大の源利成、浜田